

## 楽しい歌曲、子どもたちの笑い声

## 舞台評

山形オペラ協会は本年度、山形市の遊学館ホールを会場に「2Days音楽祭2023

あたらしい一步」と題して、2日間に3回の公演を行った。子供から大人までが楽しんで、気軽に足を運んでもらえるようにという企画である。

1日目は「あなたをいやす歌の泉」をテーマにしたコンサート。真下祐子をはじめとする6人の歌い手が、オペラアリアや歌曲、女性アンサンブルによる美しい重唱を披露した。

今回特に注目したのは、2日

目のオペラ「泣いた赤鬼」の公演である。高島町出身の童話作家浜田広介の原作を基に、日本を代表するオペラ作曲家松井和彦が創作し、高い評価を得ている作品。幕開きはいつもの洋装とは異なり、和服姿の語り部が舞台袖に登場した。物語の筋を歌でつなぎ、各場面を役者がオペラで表現する構成だ。装置はシンプルだが、青空を基調としたきれいな照明によって動く立体絵本のように見えた。衣装も役柄に応じた色合いの工夫があり、楽曲と演劇性のアンサンブルがとてつもなく良かった。

役者は赤鬼、青鬼、村人夫婦と木こりや村娘など7人。中でも赤鬼を演じる宮下通の柔らかか

で繊細な歌唱、青鬼役の鈴木集の野性味と迫力のある歌唱は、豊かな表情とコミカルな演技によって観客を最後まで引き付けた。村人たちが気のよい赤鬼を呼び出す場面では、観客席の子供たちにも加わってもらおう巧みな演出でひととき盛り上がり、赤鬼と村人が歌でしりとり遊びをする場面は庄巻の歌唱リレーとなった。青鬼が残した手紙を読むラストは、赤鬼の幸せを祈る青鬼の深い友情と別れの悲しみにはさまれた不条理を切なく歌い上げて、胸を打った。

今回の成功は、子供にも伝わる童話劇に取り組み、豊かな感情表現と演技に細やかな目を注いだ藤野恵美子の演出の力量に

よる。歌唱のレベルを下げずに、明瞭な日本語で全身で歌い切った歌手にも拍手を送りたい。その結果、大人をもうならせる緊密で質の高い舞台となった。なお、会長の藤野祐一が舞台の動きに応じて演奏指揮を行い、ピアノの山科由樹、長岡茉穂が力強く抑揚のある演奏で情景や歌い手の喜怒哀楽を支えたことも特筆したい。

今回の企画のように、親子を対象にした舞台の工夫で、芸術を身近に親しむ種子を子供たちの心に育てていく努力がとてつもなく大切に思えた。久しぶりに楽しい歌曲と子供たちの元気な笑い声に癒された、素敵なオペラコンサートであった。

(近江正人・舞台評論家、新庄市)

7月8、9日、山形市・遊学館ホール



オペラ「泣いた赤鬼」の一場面 (山形オペラ協会提供)